牛子華先生の「絵画の遍路」

日本の一部の地方には、「遍路」という伝統がある。それは、もともと一種の仏教信仰に基づく、聖地を巡って礼拝しながら心身の修練を行う旅であり、なかでも四国の「八十八カ所霊場遍路(以下、八十八カ所遍路)」は最も有名である。

「四国遍路」は、四国出身の弘法大師・空海と縁(ゆかり)がある。千二百年前、空海は、仏法を修得するために命をかけて唐に渡り、長安の青龍寺の恵果和尚門下で密教を学び、帰国して日本仏教の真言宗を創立したのである。四国は空海の故郷なので、空海逝去後に人々が相次いで四国まで足を運び、空海の「霊跡」を訪ねて参拝し、心身を修練したため、次第に遍路の伝統が形成された。後に、四国遍路の場所は八十八カ所霊場として確定し、これらの寺院は、それぞれ空海大師の「発心」から「修行」、「菩提」、さらに「涅槃」までを代表する道場と見なされている。四国遍路の道程は全部で千四百キロに及び、しかも四国は山が多くて辺鄙な土地でもあるので、八十八カ所を歩き通すことは、一種の苦行であると言ってもよい。しかし、このような苦行を通じて、心の汚れを洗い清め、意志を鍛えあげ、心の境地を高めることができるのである。

仏教では、しばしば「因縁とは不思議だ」といわれる。空海が修行した長安、今の西安市で一人の画家が育てられた。愛媛在住の中国人画家・牛子華先生である。先生は、空海を敬慕してやまず、中国の伝統的水墨画法を用いて、四国遍路の八十八カ所霊場を描くことを志し、四国の地に移り住まれた。その後、長期に亘る苦労を黙々と積み重ね、遂にこのたび創作の大半を完成されたので、その一部を公開することとなったのである。

牛子華先生は、すべての寺院を描く前に必ず現地へ足を運び、実際に自分の目で見て写生をし、構想を吟味したうえで創作を行った。こうした丹念な創作を通じて、数々の絵画は奥深い画境を呈し、人々を引きつけて夢中にさせることが可能となったのである。これらの作品は、いずれも精巧緻密な作画、心血を注ぎこんだ努力によって完成したものである。しかし、その先生が実は経済的に恵まれず、制作費にすら事欠き、霊感を得るために現地で創作するとき、車の中で服を着たまま長い夜を過ごしたことを、誰が想像できようか。牛先生は、こうした清貧に甘んじて、自分の人生の中で創作意欲が最も旺盛な時期に、崇高な志を抱き事業に邁進した。彼の「遍路」の長い旅路はいつしか十七年を過ぎたが、苦しい旅路はこれからもなお遠く、少なくともさらに数年の時間を要するであろう。牛先生の創作事業はまさに「絵画の遍路」といえるであろう。

古代から現在まで画家は数多くいたし、四国遍路を旅した人々は更に数えきれないほど多い。しかし、牛先生のように貧困に安んじで自ら信じる道を進み、理想の実現を目指して諦めることなく、ひたすらやり通している「画家お遍路」は何人いるだろうか。もしも、天国にいる空海（弘法大師）が地上のことを分かっておられたら、牛先生のこうした壮挙に深く感動しておられるはずである。

中国仏教協会会長であった趙朴初居士は生前、「仏教は中日友好関係を結びつけたゴールデンベルト」と言われた。牛子華先生は仏教徒ではないが、清浄な心を持っており、だからこそ、彼の画筆によって、数多の古刹が静まりかえり、山河が麗しい仏の国を表すことができたのである。「字は人を表す」とよく言われるが、実は絵画もまた人を表すのである。牛先生の絵画に表れた清浄な美しさは、まさに先生の清水のように澄んだ心を表現したものである。牛先生の人柄は、正直、純朴、謙虚、温厚であり、巧言令色とも無縁、身勝手で高慢な芸術家風を吹かせることも一切ない。それ故に、周囲の人々から深く敬愛され、私たち、愛媛在住の中国人たちはみな親しみを込めて「牛老師（ニュラオシ）」と呼んでいる。

牛子華先生の創作には、もう一つの深い意図がある。それは日中友好への願いである。四国遍路は空海と縁（ゆかり）をもち、その空海はまさに日中の文化交流と友好の象徴的存在である。牛先生の作品は、この空海に対する心のこもった記念品でもあるのだ。今回、展示された作品には、青龍寺を描いた二つの絵巻がある。一つは西安市の青龍寺であり、もう一つは高知県の青龍寺である。実は、西安の青龍寺には空海の像がまつられ、高知の青龍寺は空海の師の恵果和尚を偲んで建立されたのである。牛先生の絵巻によって、この二つの青龍寺が一つの場所に集まるのは、日中関係が冷え込んでいる現在、意味深いことである。絵巻に託された日中友好への願いは、まさに牛子華先生の菩薩のような慈悲心を示しているのである。

愛媛大学教授　　邢（シン） 東風（トンフォン）
（愛媛県華僑華人連合会副会長）
2014 年 4 月 18 日　于松山